伝説を知る

種から芽を出したヤチダモ

言い伝えの中にある真実

木には様々な伝説があります。これは、昔の人々が、自然に対しておそれと尊敬の気持ちを持ち、何より自然を身近に感じていたからでしょう。伝説には、その木の持つ特徴や人との関わりが色濃く現れています。

そして、伝説から自然とのつきあい方を学び、人としての生き方も学んでいけます。

ここでは「アイヌ植物誌」（草風館　1995）の著者である福岡イト子さんから、ヤチダモの木に関するアイヌ伝説を紹介していただいています。

ヤチダモ

ヤチダモの木の神が自分の体験を語る物語

〈ヤチダモ＝ピンニ〉

滝の上にいると川下から枯れ枝を踏み鳴らし、若いオキクルミがまさかりと斧を持って私（ヤチダモの木の神）のそばにやって来た。

「おい、心がけの悪い腐れ木よ。お前の固い肉を引っ込めて柔らかい肉を出したなら、舟にこしらえて交易に行ってくるからな。この腐れ木よ」と言いながら根元へ来た。

私は腹が立ってわざと柔らかい肉を隠して固い肉を出してやると、若いオキクルミは私をたたきまくったので刃がガタガタになり、悪口を言いながら行ってしまった。

またどこからかサマイェクル（国造りの神）が来て礼拝しながらこう言った。

「ヤチダモの木の神よ。あなたの柔らかい肉を出して固い肉を引っ込めてくれたなら、美しい舟にこしらえて交易の品をいっぱい持ってお礼にまいります」

私はその心に感動し、私の固い肉を引っ込めて柔らかい肉を出してやった。サマイェクルは約束どおり酒とイナウをいっぱい作ってお礼に来た。私もおみやげをたくさんもらったお陰で神のなかでもより重い神となった。

（杉村キナラブックロ伝「けなしたオキクルミには肉を固くし、誉めた国造りの神には肉を柔らかくした、ヤチダモの自叙」『アイヌ民話全集１　神謡編１』中川裕 校訂、大塚一美 編訳　北海道出版企画センター　1990　より、福岡イト子 要約）

舟の材料をいただくには、まず木の神に礼をつくしてお願いをする。すると木の神は心のよい者には喜んで「柔らかい肉」を差し出して切りやすくし、心のよくない者にはわざと「固い肉」を出して切られまいとする。

ヤチダモの木の神には感情もあれば、人の心をよむ能力も持っている。自分の「肉」が舟となって人間の役に立ったヤチダモの神は、この世での使命を果たして神の国へ行った。

上川地方の言い伝えによれば、ヤチダモの木で舟を作ると豊漁に恵まれるという。

（「アイヌ植物誌」福岡イト子 著　草風館　1995　より、著者書き下ろし）

イナウ（木幣） アイヌがカムイに祈りを捧げる時に用いる祭具。ヤナギやミズキ、キハダの木を削って作られることが多い。
（「北の生活文庫 第２巻 北海道の自然と暮らし」関秀志・矢島睿・古原敏弘・出利葉浩司　北海道新聞社）

晩秋のヤチダモ